

『〇六〇〇猶二人生存ス』関連年表

1900年

アメリカ海軍が、近代潜水艦の元祖ホーランド号を就役。列強各国の海軍、潜水艦に注目し開発を開始する。

1910年4月15日

日本海軍潜水艇、第六潜水艇が潜航訓練中に沈没。乗組員14名全員死亡。艇長の佐久間大尉の遺書により事故後の艇内の様子が推測され、職務を全うし殉職した佐久間艇長や乗組員は賞賛を浴びた。

1914年～1918年

第一次世界大戦。潜水艦が実戦使用。特にドイツ海軍はこれを重視し大戦果を挙げた。

1932年

敵艦に肉迫し魚雷を打ち込む、超小型潜水艇が日本海軍で開発開始。「甲標的」と命名される。この発想がやがて「回天」に繋がる。

1941年12月8日

太平洋戦争勃発。初戦の真珠湾攻撃において甲標的が初めて実戦使用。戦果はなかったが、勇敢な小型潜水艇での敵地侵入は大いに戦意高揚に利用された。

1942年12月

黒木博司が甲標的の講習員となり、訓練や甲標的の改良に取り組む。

1943年初頭

戦局の悪化により、海軍上層部で人間魚雷の構想が語られ始める。まだ「必死の兵器」への抵抗感が強く、具体化はしない。

同年10月

黒木博司、盟友の仁科関夫と同室になる。二人はやがて人間が操縦する魚雷を発案し、実現を海軍中央に嘆願し、却下される。

1944年2月

黒木博司、上京し再び人間魚雷実現の嘆願書を提出する。海軍中央はついに2月26日、黒木・仁科考案の人間魚雷の試作を命じる。

同年4月4日

正式に人間魚雷が新戦力として提案され、担当主務部が定められ、実現化の道が開かれる。

同年7月初旬

試作3基が完成。

同年7月10日

人間魚雷の訓練研究・乗員養成の為、第一特別基地隊が編成。黒木・仁科もこれに加わる。この少し前に日本軍重要拠点サイパン島陥落。戦局の悪化がいよいよ明白になる。

同年8月

人間魚雷に「回天」の名が与えられる。同時期、サイパンに続きテニアン島・グアム島も陥落。日本軍の定めた絶対国防圏の最前線が崩れる。

同年9月1日

黒木・仁科も中心となり、山口県大津島に独立した「回天」基地が開かれる。

同年9月6日

訓練初日、黒木博司・樋口孝による事故が起こる。

同年11月8日

実戦投入の為、潜水艦に搭載された回天隊が初出撃。これ以降終戦まで、回天隊の出撃が相次ぐ。

1945年8月15日

終戦。回天隊解散。搭乗員は出撃戦死87名、訓練中の死亡15名、終戦により自決者2名。整備員等の犠牲を合わせると145人が死亡した。

『〇六〇〇猶二人生存ス』用語解説

※作者流の解釈です

軍事

特攻 一九四一年に太平洋戦争が勃発。翌年のミッドウエーでの敗北以降、日本軍はアメリカ軍の物量に押され続ける。戦局の打開のために一九四三年頃より、軍上層部でも、現場でも必死の「体当たり戦法」による敵攻撃が議論されるようになる。倫理的な抵抗もありながら、不利な戦況はどうしようもなく一九四四年十月から翌年八月の敗戦まで、必死の体当たりを敢行する特別攻撃隊(特攻隊)が組織され続ける。飛行機による「航空特攻」、水上兵器や特殊潜航艇による「水上特攻」「水中特攻」と分類される場合もある。主目的はアメリカ軍の艦艇、特に空母であった。華々しい戦果を挙げることはできず、アメリカ軍の侵攻を止めることできなかったが、目撃したアメリカ人は精神的に大きな衝撃を受けた。「桜花」「震洋」「伏龍」等の特攻専用の兵器も開発され、人間魚雷「回天」もその一つである。

回天 小型の潜航艇で密かに敵艦に近付き魚雷で攻撃するという発想を、日本海軍は研究していた。それを更に進化させ、「魚雷そのものを人間が操縦する」という発想で誕生したのが「回天」である。特殊潜航艇の講習員であった黒木博司・仁科関夫という若い士官が発案し、海軍中央を説得してやっと実現させた兵器でもあった。1944年11月から実戦投入。80基以上の回天が実戦で犠牲になった。また欠陥が多い兵器で、15名が訓練中に殉職している。操縦には非常に高度な技術が必要であり、「6本の手と6つの目が必要」とさえ言われていた。

魚雷 水中を自走する葉巻型の兵器。対艦攻撃に使用される。中小型の艦艇や潜水艦が発射、また雷撃機や艦上攻撃機が投下して使用する。第二次大戦時の技術では直進させることしかできず、低い命中率を補う必要があった。魚雷を必中させるという発想から人間魚雷「回天」が誕生することとなった。

サイパン・テニアン・グアム それぞれがマリアナ諸島の島の名前であり、太平洋戦争中日本の占領下にあった。東條英機内閣は絶対国防圏つまり「絶対に確保を要する圏域」としてこのマリアナ諸島でアメリカを食い止めることを宣言していた。しかし1944年7月8日でマリアナ諸島は陥落。東條内閣はこれを受けて総辞職する。これは日本の敗色濃厚を内外に示す出来事だった。

人名

佐久間艇長 明治期の海軍軍人。最終階級は大尉。潜水艦の黎明期に起こった第六潜水艇事故の艇長として知られる。佐久間艇長の第六潜水艇は潜航訓練中、事故により沈没する。乗組員14名は全員死亡したものの、佐久間艇長の詳細な遺書により、全員が職務を全うし殉職したことが明らかとなった。このことは日本海軍の伝説となり、米英の海軍も佐久間艇長を賞賛した。

宇垣中將 1945年2月10日、第五航空艦隊長官に就任。鹿児島県鹿屋基地に着任し、敗戦まで特攻作戦を中心とした航空戦の指揮を執る。8月15日の玉音放送後、自ら搭乗して11機で出撃。17名の搭乗員と共に戦死した。宇垣と反対の死に方を選んだのは特攻作戦開始時の第一航空艦隊長官大西瀧次郎中將である。大西は8月16日割腹自殺を遂げるが、介錯も延命も拒み一人で苦しみぬいて絶命した。